

令和 2 年 4 月 3 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04805

研究課題名(和文) 柔道授業における安全性の確保と種目特性を味わうカリキュラムの開発

研究課題名(英文) Development of a curriculum that tastes safety and characteristics in judo classes

研究代表者

與儀 幸朝 (YOGI, Yukitomo)

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・講師

研究者番号：70773365

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は2012年度から中学一年生・二年生段階において必修化となった柔道授業について、安全性の確保と種目特性を味わうカリキュラムを開発することを目的として実施された。三年間の研究期間で、必修化以降の学校現場の実態を教員、生徒、保護者を対象とした調査で明らかにした。そのうえで安全に授業が展開できるような学習指導の在り方について、教員、研究者、専門家らで検討を重ね、研究協力校で実証し一定の成果を得ることができた。またカリキュラム開発の過程では、生徒の発達段階や特性を味わうことに重点を置き、基本動作や基本となる技の習得過程でゲーム形式の攻防を取り入れた授業モデルを開発することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

必修化以降、柔道の実施状況は剣道や相撲と比べて最も高い。しかし、これまでに生じた重大事故及び死亡事故の発生率の高さに注目が集まり、学校現場では生徒が本来の柔道の特性を味わえないまま授業が消的に展開されている実態が危惧されていた。そこで本研究によって示された、安全性を確保するための段階的指導やゲーム形式の攻防を取り入れた特性を味わうカリキュラムは、これからの授業モデルとして活用されることが期待される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to "secure safety" and "develop a curriculum that tastes the characteristics" of judo classes that were fully implemented in first and second grade junior high schools since 2012. During a three-year research period, a survey revealed the actual conditions at schools. After that, teachers, researchers, and experts examined how to teach Judo safely, and the results were demonstrated at a research school. In the curriculum development process, we focused on tasting the developmental stages and characteristics, and proposed a lesson model that incorporates game defense in the process of learning basic actions and skills.

研究分野：身体教育学

キーワード：柔道授業 柔道の安全性 柔道のカリキュラム

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

柔道を授業で実施するにあたり学校現場では、重大事故の危険性などの負のイメージにより、生徒一人一人が本来の柔道の特性を味わえないまま授業が消的に展開されている実態が危惧されていた。その背景には、柔道を専門とする体育教員が少ないことや、他の運動領域とは異なり格闘形式で展開される固有の種目特性等が内包されている。しかし、必修化になって四年が経過するが柔道授業におけるカリキュラムの開発に焦点化して、生徒の発達段階に応じた「投げ技」の学習指導や安全性に着目した学術的な研究は少ない。

### 2. 研究の目的

2012年度から中学校一年生・二年生段階において武道領域が必修化となった。学習指導要領解説保健体育編(2008)に示されている内容の取扱いでは、柔道・剣道・相撲などから選択となっているため、その判断は各学校に委ねられている。文部科学省(2015)の調査によると、その実施状況は、柔道が64.4%で最も多い。しかし、これまでに生じた重大事故及び死亡事故の発生率の高さに注目が集まり、学校現場では生徒が本来の柔道の特性を味わえないまま授業が消的に展開されている実態が危惧されている。そこで本研究では、中学校一年生・二年生を対象として、柔道授業における安全性の確保と種目特性を味わうカリキュラムを開発することを目的とする

### 3. 研究の方法

研究目的を達成するために3年の研究期間を設定した。

(1)29年度:教員、生徒、保護者を対象とした実態調査を行い、実施状況や課題の検討などを行ったうえで柔道授業における安全性の確保と種目特性を味わうカリキュラムを作成した。

(2)30年度:中学校一年生段階の柔道授業における安全性の確保と種目特性を味わうカリキュラムの実現可能性について研究協力校にて実証した。

(3)31年度〔令和元年度〕:中学校二年生段階の柔道授業における安全性の確保と種目特性を味わうカリキュラムの実現可能性について研究協力校にて実証した。

### 4. 研究成果

(1)29年度:保護者を対象とした調査では約1,200名から回答が得られた。その結果、柔道授業を実施している中学校の約8割の保護者は、重大事故やケガなどの危険性に不安を抱いていることがわかった。特に一年生の保護者が二年生及び三年生の保護者に比して不安を感じる傾向が有意に高かった(図1)。また、柔道経験がない保護者は柔道経験がある保護者に比して、柔道授業の危険性への不安を感じる傾向が有意に高かった。

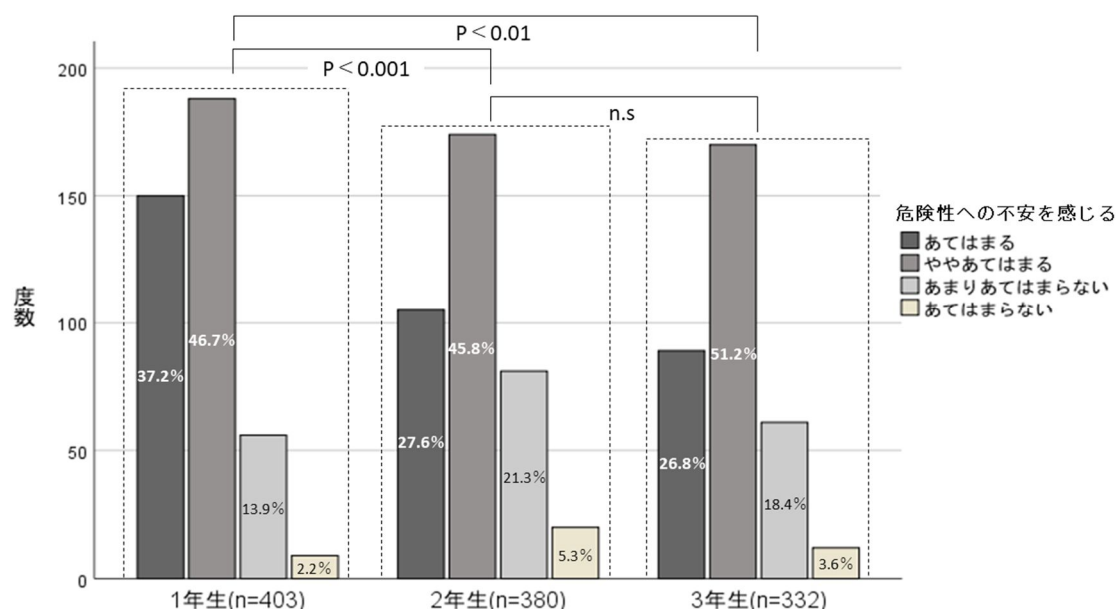


図1 柔道授業の危険性への不安(学年別状況及び学年間比較の結果)

しかし、柔道の経験がある保護者のなかでも64.7%は不安を感じていることがわかった。さらに、柔道授業の危険性に不安を感じる保護者は、不安を感じない保護者に比して、体格差や体力差の考慮は必要と考えている傾向が有意に高かった。不安を感じない保護者でも体格差(76.5%)、体力差(72.8%)の考慮は必要と考えていることがわかった。

教員を対象とした調査では約130名から回答が得られた。その結果、重大事故やケガの危険性

から特性を味わう学習指導が展開できないことがあると回答した教員が 69.9%存在し、ほぼ全ての教員が安全性の確保は他の単元より留意している実態が判明した。また、技能指導において、投げ技では、膝車、支えつり込み足、大外刈りの「取」の指導が「受」の指導に比して難しいと回答している教員が多く、固め技では全ての項目で「受」の指導が「取」の指導に比して難しいと回答している教員が多かった(表1)。

表1 技能指導に関する質問の項目別Wilcoxon検定の結果

投げ技・固め技	取の指導		受の指導		P値	Effect size
	Mean	SD	Mean	SD		
体落とし	2.103	.97	2.119	.97	n.s	-
大腰	2.048	.98	2.008	.98	n.s	-
膝車	2.063	.94	2.230	.98	.003*	.67
支えつり込み足	1.992	.92	2.135	.98	.010*	.67
大外刈り	2.063	1.02	1.603	.91	.001**	.62
小内刈り	1.714	.95	1.690	.98	n.s	-
けさ固め	2.841	.97	2.357	.95	.001**	.77
横四方固め	2.611	1.00	2.087	.90	.001**	.71
上四方固め	2.373	1.05	1.960	.92	.001**	.65

P<.001\*\* P<.01\* n.s=not significant

さらに、小学校段階から水泳や球技などと同様に柔道も導入することで学習指導が展開しやすくなる(表2) また重大事故やケガのリスクを低下させると考えている教員が多かった。特に若手の教員にその傾向が高かった。

表2 小学校段階から導入(学習指導の展開)に関する質問の分析結果

	出現割合 % (N)				Kruskal-Wallis検定		
	1) そう思う	2) ややそう思う	3) あまり思わない	4) 思わない	Median	P値	Steel-Dwass
①若手	44.9% (n=22)	30.6%(n=15)	18.4%(n=9)	6.1%(n=3)	1.74		①>②**③*
②中堅	8.9%(n=4)	37.8%(n=17)	40.0%(n=18)	13.3%(n=6)	2.57	.001*	②<①**
③ベテラン	18.8%(n=6)	34.4%(n=11)	31.3%(n=10)	15.6%(n=5)	2.43		③<①*

P<.001\*\* P<0.05\*

(2) 30年度: 安全性の確保については、中学校で初めて学習する生徒が大半を占めることからスモールステップ(低、高、弱、強、遅、早など)を用いた段階的な指導方法の工夫を行った。また活動場所の工夫を個・ペア・トリオ・グループで学習のねらいに応じて形態を変えて実施した。その結果、安全に授業を展開することができ、技能の習得状況が高まることが確認された。

種目特性を味わうカリキュラムについては、発達段階に応じて体力差や体格差を考慮して指導する技の順序性やグルーピング等を工夫した。その結果、形成的授業評価において単元が進むにつれて意欲や学び方の評価得点が高まっていった。

(3) 31年度〔令和元年度〕: 安全性の確保については、前年度の展開と同様に生徒の実態や学習環境等を考慮し、指導する技の精選を図ったうえで、単純な動きから複雑な動き、一人の動きから相対の動きなどスモールステップを用いた段階的な指導方法の工夫を行った。また、学習形態を個・ペア・トリオ・グループなど、ねらいに応じて工夫したことで安全に授業が展開でき、技能の習得状況が高まることが確認された。

種目特性を味わうカリキュラムについては、基本動作、固め技、投げ技のそれぞれの習得過程において、楽しさや喜びを味わうゲーム形式の攻防を取り入れることで形成的授業評価の変容を検証した。基本動作の習得過程では「礼法のゲーム」や「姿勢のミラーゲーム」、固め技では「頭タッチゲーム」や「抑え技の攻防」、投げ技では「ダンス&プッシングゲーム」や「投げ技の攻防」などを取り入れた。内容については、生徒の実態や発達段階に応じて工夫した。その結果、形成的授業評価の評価得点が高まっていくことが確認された。

#### 文献

・與儀幸朝(2019)中学生の保護者を対象とした柔道授業に関する調査. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 7, 45-53.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 與儀幸朝	4. 巻 70
2. 論文標題 中学生の保護者を対象とした柔道授業に関する調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 45-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 與儀幸朝
2. 発表標題 中学校保健体育科教員を対象とした柔道授業における課題の検討
3. 学会等名 日本体育学会第69回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 與儀幸朝
2. 発表標題 柔道授業が学習意欲等に与える影響
3. 学会等名 日本武道学会第52回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	眞喜志 慶治  (MAKISHI Yoshiharu)		